

お知らせ

一月例会

1月例会はございません。尚、例会資料は学生担当委員会事務局にて配付いたします。

学生層育成者講習会

日程・会場案内

直属

・城法 1月23日 大教会

報告

十一月例会

去る11月25日、第二食堂において「11月例会」を開催。出席は43教区、140直属。

各地の動き

【教区学生層育成者講習会】

・新潟 11月4日 教務支庁

・東井申雄副委員長出向

・岐阜 11月29日 教務支庁

松森芳夫委員出向

【直属学生層育成者講習会】

・淀 11月23日 分教会

坂本輝男委員出向

人事

《立教 188 年 11 月 25 日付》

【直属学生担当委員長辞令交付】

・西 初博（南海・紀尾）

・松田善夫（城法・高田町）

業務記録

《立教 188 年 11 月 16 日～12 月 15 日》

11月24日 広報部部会

25日 委員会

学生担当者大会 例会

12月4日 学修係員チーム会議

5日 学修部部会

6日 大学の部研究室

高校卒業生コース研究室

人材育成部部会

広報部部会

7日 委員会

高校の部研究室

学生部部会

9日 教祖百四十年祭

学生おぢばがえり大会

プロジェクトチーム会議

担当者活動部部会

まなびば研究室

まなびばチーム会議

10日 事務局連絡会

11日 学生連絡会

1

Vol. 467
立教 188 年
2025 年
12 月 25 日発行

「立教百八十八年 学生担当者大会」における表統領中田善亮先生お話 十一月二十五日・第二食堂

本日は、学生担当者大会に忙しい中、ご参加いただき誠にありがとうございます。また日頃から学生さんたちの育成、丹精の上にそれぞれご尽力を賜りまして誠にありがとうございます。

いよいよ教祖百四十年祭が迫ってまいりました。私たち自身の年祭活動は、もうここまでできましたら何も申すこともありません。とにかく、年祭当日までの仕切りのそれぞれの活動を、それぞれが最後まで緊張感を持ってつとめ切っていくことに尽きますので、そのことについては、今日はこの一言だけにさせていただきます。ただし、それぞれの成人の歩みは、それ自体が年祭の日で終わるものでももちろんありません。私たちの成人の歩みは生涯の歩みでありますから、学生担当者というそれぞれがお持ちいただく立場の上から、学生たちを導く姿勢として、その先達として、引き続きしっかりとお務めをいただきたいと存じます。

さて、昨年この席で、真柱様からメッセージを頂戴

学生担当者報

発行 / 天理教学生担当委員会 発行責任者 / 中山祥吉 編集責任者 / 東井申雄

TEL 直通: 0743-63-2489 FAX 0743-62-5780 E-mail tsa@tenrikyo.or.jp

TSA Website https://tsa.tenrikyo.or.jp Happist https://happist.net



いたしました。「みちのとも」で振り返ってみますと、その題名として、「焦らず、諦めず、勇み心をもって、大事な道の後継者の育成を」となっております。考えてみれば、学生会の会員たちは、在籍年数が限られております。概ね、高校生なら3年、大学生なら4年であります。実際には、もつと短いのが現場の感覚だと思います。ですから、焦らず、諦めずというお言葉をしっかりと咀嚼する必要があります。例えば、1人の学生にフォーカスすると、接する時間は限られてくるわけでありす。しかし、少し考え方を発展させていきますと、皆さんの前を通っていく学生さんたちに、皆さんの求道の姿勢であったり、信仰によって得られる喜びや感激というものを、皆さん自身の生の声で聞かせるということを経道に行っていくということを抑せられているんじゃないかと思うわけでありす。そして、最も手本とすべきが教祖のひながたにあるということに思いをいたせば、私たちの信仰姿勢がひながたに準拠しているということをしつかり言葉に出せるように、またその言葉が重みを持つように、私たち自身が素直にひながたを辿らせていただくということが、第一であるということとは申すまでもありません。

教祖は、全く何も知らない子供たちに、それこそたった

お一人から50年もの年月をかけて、どんなことがあっても諦めずに教え導くひながたをお残しくださいました。皆さんが学生担当者として務める年月、あるいは我が子や孫や教会の若い人たちを導いていく年月、さらには教会長としてようばく、信者を丹精し導くについても、教祖のひながたのように、私たちはゼロからの出発ではないし、また1人ではなく、仲間や同志が周囲にいるのであって、そう思うだけでもありがたい環境が揃っているということを楽しむながら務めさせていただくべきだと思います。とは申せ、世代を超えて道の素晴らしき、信仰の喜びを伝えるということはやはり簡単なことではありません。何かと経験が少なく、感覚や考え方も自分とは全く違う若者たちに正しく教えを伝えようとする、そこにはやはり工夫というものが必要になってまいります。昨年のこの席での真柱様のお言葉にこのような一節がありました。

「親神様が、世界一れつをたすけたい、と表に現れ出ら

れてよりこのかた、月日は流れて、人間の暮らしは大きく変わりましたが、だからといって親神様の思召は変わらないし、教祖の教えも変わらないのであります。陽気ぐらしの世の中は、いく世代もかけて、誤りなく受け継ぎ、受け渡してこそかなうことですから、その時代その時代に教え

「立教百八十八年 育成に役立つ研修会」開催報告

11月27、28日の二日間で、本部第七・八・九母屋を会場に「育成に役立つ研修会」を開催し、教区・直属・海外から31名の方に受講いただきました。

今年も、グループワーク体験コース、トレーナー育成コース、プログラム構成コース、育成者支援コースの4つのコースを設けました。

グループワーク体験コースでは、学生層育成行事で使っているグループワークを実際に体験することで、その有効性を知り、講義からその心得を学んでいただきました。

トレーナー育成コースでは、各種育成行事で使っているグループワークの理解を深めるために、その進め方を習得し、「トレーナーの心得」と題した講義から、トレーナーを務める上で必要な心構えを学んでいただきました。

た。

プログラム構成コースでは、各種育成行事の企画、立案、プログラム作成についてを解説を交えた実習形式で学び、「プログラミングについて」などの講義を聞き、行事の企画、開催に対する意識を高めていただきました。

育成者支援コースでは、育成者としての心構えを学ぶとともに、「現代の若者の特徴について」の講義や、現役学生の声を聴ける座談会などから若者の特徴や流行りを知り、関わり方を考え、いち育成者として自分にどんなことができるかを受講者同士で共有しました。

コースごとで内容は異なりますが、この研修会を通して、受講生は育成に對する新たな気付きを得られているように感じました。

青 空

約三年前に受講した教人講習で「今月は諭達がご発布される有難い月。三年千日どう通らせていただくかおぢばでしつかりお願いをして過ごしましょう」と聞かせていただき、自分のことで頭がいっぱいになっていた私は、反省と共に教祖にお縋りするような気持ちで神殿に足を運びました。

なんとその後、16期学生担当委員会の本部スタッフのお声をいただき、教祖百四十年祭までの三年千日を本部スタッフとして通らせていただけることになりました。素敵な仲間との出逢いがあり、学修のご用では一生懸命に信仰と向き合う学生さんの姿を通して、私自身が学ばせていただくことばかりでした。

ついつい先が不安になっしまう私に、学担の先生方は「いつも教祖と一緒にいてくださる。教祖ならどうなさるか考えながら日々喜んで通ろうね」とその時々温かい言葉を掛けてくださいました。教祖のぬくもりを少しでも学生さんに感じてもらえるように、自分にできることを精一杯喜んでつとめさせていただきたいです。

人材育成部部員 加藤友理



第六十三期天理教学生会委員長選挙報告

11月15日、東右第一棟 天理教校四階講堂を会場に「第六十三期天理教学生会委員長選挙」が行われ、運営委員 21 名が出席し、傍聴者 13 名が訪れました。

今回は天理大学一年生の久住優斗さん（佐野原大教会）が立候補しました。久住さんは所信表明において「神様の教えを基に天理教学生会のみんなと素直な心で何事にも喜べる学生会にしたい。そしてそのために、教理を学ぶこと、教会につながることに、ひのきしんを推進したい」と、第六十三期天理教学生会にかける思いを述べました。その後、運営委員による活発な質疑応答が行われました。学生たちは立候補者の答弁に真剣に耳を傾けました。

投票の結果、久住さんは次期委員長として信任され、出席者一同は、次期委員長を芯とし、来春から始まる第六十三期天理教学生会の一層の充実を誓いました。

を正しく伝える工夫は必要であります。しかし、ここで気をつけなければならないことは、教えを理解しやすいようにと工夫することが、かえって、教えの筋道を曖昧にしたり、自分勝手な思案の仕方に導くことにもなりかねないということでもあります。時には立ち止まって自分を振り返り、果たしてこれでよいのか、と自己点検し、間違いに気づけば、謙虚にやり直す心の広さを培ってもらいたいと思います。」

このようにご指摘をくださいました。よく分からせていただくことではありますけれども、難しいことでもあります。学生たちに近づきたいという率直な思いから、彼らにとって理解ある人、わかりやすく話してくれる人と思ってもらいたいという気持ちは、大なり小なりあるのではないかと思います。その通り、優しくわかりやすく話してくれる大人が必要な一方で、言葉を飾らずに教えやひながたをストレートに話す人も必要だと思います。要は、それを一人で二役することはなくて、2 人で行えばいいのであって、大切なことは、その 2 人がよく相談をしているということでもあります。ともすれば、お互いにあの先生の言うことはちよつと難しいよねとか、あの先生の言い方はわかりやすいけれども、底が浅いよねとか、そういったような状況に

ならないようにお互いが承知し合っているということでもあります。変えてはならない教えが、そのつもりはないのに、いつの間にか変わっていったという事は、教祖からご覧になればとても残念なことに違いないと思います。担当者のみならず、教会が一手一つに若い人の育成にいつも心を向けて、それぞれの役目を果たしていただきたいと願います。

少し話を変えますけれども、学生会は、仲間を作るといふところに重きを置いているところがあります。それは大いに結構ですが、それで終わるのではもったいないのであります。学生会活動に熱心に頑張っていた者が、卒業とともに熱から覚めたように、信仰から離れていく。そんな姿は少なくないと思います。もちろん原因は様々あると思いますが、私は一つには、仲間作りや、その中の楽しさ、集める充実、そういったものに重きがあつて、信仰的な部分で、つまり自分と信仰ということを真摯に捉えきれなかったところがあるのではないかと思うんです。単純に考えても、学生会で懸命に活動したことが、その後の彼らの人生での成人の歩みの礎になってくれれば、これは非常にありがたいことであります。青年会や婦人会の活動のみならず、末永く教会に繋がってくれることを、おそらく

立教189年 学生担当委員会 行事計画

月	学生担当委員会行事
1	おせち学生ひのきしん隊(4～7) ※4～7まで真南棟の事務局は閉鎖。事務所機能はおせち学生ひのきしん隊事務所へ移します。 ※1月例会は無し(事務局にて資料配布のみ行います)
2	学生生徒修養会 大学の部 スタッフ事前研修会(2～4) 学生生徒修養会 高校卒業生コース スタッフ事前研修会(2～3) 例会(25)
3	学生生徒修養会 大学の部 スタッフ直前研修会(2～3) 学生生徒修養会 大学の部(4～8) 学生生徒修養会 高校卒業生コース スタッフ直前研修会(9) 学生生徒修養会 高校卒業生コース(10～12) ※2～12まで真南棟の事務局は閉鎖。事務所機能は学修総務へ移します。 例会(25) 教祖140年祭 学生おぢばがえり大会(28) ※27～29まで真南棟の事務局は閉鎖。事務所機能は学生おぢばがえり大会事務所へ移します。
4	まなびばLite研修会(25) 教区・直属合同での担当者懇談会・懇親会(25) 例会(25) まなびば研修会(26～27) 学生生徒修養会 スタッフ初回者研修会(26～27)
5	例会(25)
6	まなびばLite研修会(25) 例会(25) 学生生徒修養会 高校の部 スタッフ事前研修会(27～29)
7	例会(25) こどもおぢばがえり学生ひのきしん隊(27～8/3)
8	学生生徒修養会 高校の部 スタッフ直前研修会 学生生徒修養会 高校の部 ※日程に関しては2月25日例会にて発表予定 ※学修期間中、真南棟の事務局は閉鎖。事務所機能は学修総務へ移します。 例会(25)
9	道の学生ひのきしんDAY 例会(25)
10	例会(25)
11	学生担当者大会(25) 例会(25) 育成に役立つ研修会(27～28) 学生生徒修養会 スタッフ初回者研修会(27～28)
12	例会(25)

ここににいる全員が望んでいることだと思います。ならば、学生会活動やおぢばがえりを通しての仲間作りで終わるのではなくて、仲間と共に活動する、その活動の内容に重点を進めていって、信仰的成人の歩みに繋がることをイメージしていかなければならないと思います。仲間を作り、互いに心を打ち解け合って、時には祈り、喜び合う。それだけで終わるのなら、乱暴な言い方かもしれませんが、私はサークル活動の域を出ないと思うのであります。親神様の思召はどこにあるのか。教祖は自分に何を求められるのか。この悩んでいる仲間の真のたすかりはどこにあるんだろうか。そういったことを今の学生さんたちに求めるのは、ひよっとしたら難しいことなのかもしれません。けれども、学生会を終えて、社会に出てからが人生の本番であることを思えば、生涯求道者という私たちよ、う、ぼ、くのあるべき姿勢を、この道を歩む楽しみというものを彼らに伝えていくことが、学生担当者としての信念でありたいと思うのであります。そして、そこから人生とともに成人の歩みを進んでいく彼らが、いつの日か、学生担当者という立場に立って、自分の経験から、学生さんたちを丹精してくれる姿を、ここにいる私たちは楽しみに持って努力を重ねたいと思います。念を押して申しますが、仲間作りを否定するわけではあり

ません。大いに結構であります。そこから次へ繋いでいく楽しみを共有していこうということであります。その点は誤解のないようお願いをいたしたいと思います。

最後になりますが、会場内の横断幕にありますように、来年3月に開催される「教祖百四十年祭 学生おぢばがえり大会」、皆さんよくご承知いただいて準備をしてくださっているとと思います。大勢の学生さんたちにおぢばへ帰っていただきたいと思ひます。そのための大会であります。今も申したように、仲間作り、おぢばがえりのお誘い、大会への勧誘、どれもが成人の歩みの第一歩であります。そして、やはり声をかけて共に帰ってもらえる喜びは、通った者しかわかり得ないものでもあります。大勢の学生たちがおぢばで賑やかに楽しんでくれる姿を、当日は教祖百四十年祭直後でありますけれども、教祖にぜひご覧いただいて、お喜びいただければ、我々の幸せであります。どうぞこちらの方も一手一つに取り組んでいただきたいということをお願い申し上げます。今日の話とさせていただきます。どうぞこれからもよろしくお願い申し上げます。

(文責 中山祥吉)



「立教百八十八年 学生担当者大会」における
中山委員長挨拶 十一月二十五日・第二食堂

本日は足元の悪い中、また教祖年祭があと2ヶ月と迫っている本当にお忙しい中、こうして学生担当者大会にお集まりいただきまして誠にありがとうございます。

今年5月25日、今から半年前になりますが、覚えておられますでしょうか「教祖百四十年祭 学生おちばがえり大会 決起の集い」を開催いたしました。そのときには、各教区直属の担当委員長先生がそれぞれの学生を連れて、このおちばがえり大会に向けてどう取り組んでいこうか、何からさしてもらおうかという話をしていただきました。私が一番印象に残っているのは、若い学生と触れて嬉しそうなおじさんの顔しか覚えてないんですが、そのときに感じたことは大人だけで考えちゃ駄目だと思ったんです。学生がどうやったら勇むだろう、どうやったら喜ぶだろう。そんな心をやっぱり私たちも持たせてもらいながら、学生に勇んで欲しいな集まってほしいなという思いを共有しながら歩むことが大切だなと感じたんであります。

「広島教区学生会の総会が12月にあります。そこに向けておつとめ練習をさせていたきたいんです。会場に先生

があればこそ、そしてこの人に支えてもらえていたんだということに気づいた。これを歌にしてくれました。歌詞は実行委員会で、少し触らせていただきましたが、彼の思いはこの中に踏まえられています。敵なんかないって書いてあります。自分のことを批判する人のことを全て敵だと思ふ。それが今の若い子たちの気持ちだそうです。そんな若者に今の学生にこの曲をぜひ届けたい。そしてこのおちばがえり大会に帰ってきてほしい。この思いをぜひ先生方から伝えていただきたい。学生に「イメージソングができたらいいから聞いて」とではなくて、「こんな思いで作られてるよ、今を生きる今を生かされている君たちにぜひこのお道の教えを知ってほしいし、またそれを心の支えとしてやってきている子たちがいる。その姿を見て感じるものがきつとあるはずだ」と伝えていただきたいと思うんです。

「やさしい心になりなされや。人を救けなされや。癖、性をとりなされや。」

(稿本天理教逸話編一二三)

昨年のこの担当者大会で真柱様のメッセージを頂戴しました。本当に多くのことを学ばせていただいたんですけれども、私の中で、この一節が一番心に残りましたので、お伝えしたいと思います。

「学生会に集まってくる学生たちは、みんないんねんあつてお引き寄せいただいた、大切なこの道の後継者であります。そして皆さんは、そうした学生の育成を心がけておられるはずであります。学生たちの成人を願って彼らと向き合い、心を込めて親神様、教祖の親心を伝えて、幸せに繋がるこの道の通り方を教えることに力を尽くしてもらいたいと思います。」

とお話くださいました。ただいまの表統領先生のお話にもありましたが、ぜひとも私たち自身が、教えを素直に受け取って、それを実践し、元気に大人が頑張ってる。その姿をいんねんあつてお引き寄せいただいた学生たちに見てもらいたいなと思います。それがこの大会に繋がり、そして大会を終えた後にも、学生たちの心の糧となり、おちばへと繋がる機運と繋がっていくと思います。どうぞよろしくお願いいたします。本日はお集まりいただきまして誠にありがとうございました。

の教会使っていいですか」と連絡が来ました。どうぞ使ってくださいよと答えました。当日は学生、学担の先生もたくさん来られて、勇んでおつとめの練習をしてくださいました。そんな中で 1 人の学生と話ができました。その子は高校 2 年生、所属の教会は九州にあると言っていました。何で教区の学生会に来るようになったのと聞きましたら、所属の会長さんが、「近くの学生会でいい。そこへ参加しておいで、きっと自分の居場所ができる。そこで楽しんでおいで」と言っていたいたそうです。実際にその子は広島教区の学生会に参加するようになり、本当に楽しんでいました。また、「いろんな気づきをもらえるんです。お道の友達との会話の中から、教祖の年祭に向かっていることや、総会に向けておつとめ練習があると伝えられ、なかなかできなかったおつとめも、この機会に練習させてもらえました」と言ってくれていました。最後にその子は本当に今、「学生会の中に自分の居場所がある」と言うんです。すごいことだなと私は思わせていただきました。

学生担当者報

またもう一点、実は昨日、ある大教会の学生担当者の集いがありまして、こちらへ呼ばれましたので行ってきました。そうしましたら、直属の学生会の委員長が、大学の授業の合間を縫って学担の先生方をお願いに来たんであります。

勢を伝えさせてもらうんだ。これを忘れることなく歩みたいと思わせていただきます。

先日こんな子に出会いました。10 年前の学生おぢばがえり大会にバリバリ学生会をやったという子です。あの時は精一杯動かしもらって良かったですと、今もその子は熱心にお道に繋がっています。また、もう 1 人出会えたんです。それは、前回の大会のときに、おぢばえり大会があるから行っておいでと声をかけられて、たまたま 1 回だけ来たという子です。その子と最近知り合ひまして、参加してみてもうだったと聞きましたら、「すごいところやな思いました」と、「どういう意味？」と聞きましたら、それは「同年代の学生が、学生のために精いっぱいやろうとしてる姿がすごい」と、その子は教区参加でしたけれども、「教区の学生会のスタッフがみんなの事を思っていてやっている。同じ学生なのにすごいなって思いました。そして、おぢばに帰ってみて、式典に参加したとき、中庭にこれだけ多くの同じ道に繋がる仲間がいるんだということに触れて、さらに驚きました」と教えてくれました。ただ、その子がそこからどんどん熱心になったかといえばそうではないんです。すごいなと思うのは、やはり一度そこでおぢばに帰ってきた。そして、親心をかけていただいた。その経験が今

学生担当者報

す。大学 3 年生の男の子はこう言っていました。「私はこの学生おぢばがえり大会で、これから共に道を歩んでいく仲間を作りたいんです。そのために僕たちは精一杯、学生会を通して声かけをさせてもらいます。でも、それでは足りないんです。どうぞ先生方の力を貸してください」学生が本気で言っていました。そう思いますと、今回の学生おぢばがえり大会、出足は少し遅かったのかもしれませんが。しかし、今になって、各教区または直属で、学生の気持ちはこの大会に向け、またおぢばに向け、高まってきたるように感じさせていただきます。学生の話ばかりしておりますが、つまりは、このように学生が何とかしておぢばへ帰りたい。これから先を共に歩む仲間を作りたいと思えるようになってきたきっかけは、平たく申せば私はやはりここにいてくださる。学担に携わる先生方、また学生の育成に携わる方々の尽力あつてこそだと思わせていただいております。大会まであと 4 ヶ月となりました。もう間に合わないか。そんなことはないと思うんです。まだ声のかかっていない学生がいるはずです。まだ当日帰ろうか帰らないかを迷っている学生もいるはずです。最後まで私たちが声かけをさせていただきます。そして、ただいま表統領先生からお話いただきましたが、大会に向けた中で学生に私たちの信仰姿

になつて、お道に繋がろう。そうだったんだそうです。そう思いましたら、残り 4 ヶ月ですが、私たちも声かけを最後までさせていたいただきたいと思います。最後まで学生の育成を願ってさせていただきたいなというように思わせていただきます。

半年前、私も副委員長として、先生方の前に立たせていただきました。そのときには、みんなで一歩前進した姿で教祖にお喜びいただくという話をさせていただいたように思います。そのあと押しとして、今日発表しますのは、大会イメージソングです。今、大学 3 年生から高校 1 年生の間の学生は、コロナ禍中に小学校中学校を経ています。人と人との繋がりを大事にしたい。どうやったら友達ができるのか、どうやったら相手の気持ちがわかるのか、ということをや育まなきゃいけない、そんな時間が大変だった学生さんたちです。実はこの曲を作ってくれた学生が、「やさしい心」という題名で曲を作ってくれました。これは、友達に会いたくても会えない人との繋がりがどんな希薄になつていく中で、そんな中で自分自身を支えてくれた人がいたんだ。どこまでも優しくかった、親切だった。なんでそんなことができるんだろう。そう思ったときに、実はその人の心の底にはこの教えがあった。このお道の教え